

# 恐れつつ、主に仕えよ

詩篇2篇 1-12節

## はじめに

毎月第四週は、旧約聖書から説教をすることにしています。昨年で「ヨブ記」を読み終えたので、今年から「詩篇」を少しずつ学んでいきたいと思っています。と言っても、詩篇は全部で150篇あるので、全部学ぶと大変なので、いくつかの詩篇を選んで学んでいきたいと思っています。今日は、2篇を学びますが、この2篇は「王の詩篇」と呼ばれるもので、特にイスラエルの国に新しい王が立てられる即位の時に読まれた詩篇だと言われています。

## 1. 主と主に油注がれた者に対する敵対

まず1-3節を見てみましょう。「**なぜ、国々は騒ぎ立ち、もろもろの国民は空しいことを企むのか。なぜ、地の王たちは立ち構え、君主たちは相ともに集まるのか。主と、主に油注がれた者に対して、『さあ、彼らのかせを打ち碎き、彼らの綱を解き捨てよう』**」。ここには、イスラエルの国に対して、敵対し、戦いを挑もうとしている国々の王たちや国民の姿が描かれています。国々の王たちは互いに協力して、イスラエルの国を倒そうとしている、そういう姿です。

ここに「主に油注がれた者」とありますが、これはイスラエルの「王」のことです。イスラエルの王として任命される人は、油を注がれて、その働きを全うできるように神様の霊の力を受けたのです。

地上のあらゆる王たちが、神様に油を注がれたイスラエルの王に敵対し、戦いを挑もうとしている、しかし神様に油を注がれたイスラエルの王に敵対し、戦いを挑むということは、神様ご自身に敵対し、戦いを挑むということでもあったのです。

## 2. 天の御座に着いておられる方

では神様は、そのような地上の王たちの姿をどのように見ていたのでしょうか。4-6節を見てみましょう。「**天の御座に着いておられる方は笑い、主はその者どもを嘲られる。そのとき主は、怒りをもって彼らに告げ、激しく怒って、彼らを恐れおののかせる。『わたしが、わたしの王を立てたのだ。わたしの聖なる山、シオンに』**」。地上の王たちが神様ご自身とイスラエルの王に敵対して、戦いを挑もうとしている姿を見て、神様は笑い、嘲り、激しく怒られるとあります。聖書で「主」と呼ばれる神様は、ここで「天の御座に着いておられる方」と呼ばれています。地上の王たちは、地上の王座に着いているだけですが、私たちが信じている神様は、天の王座に着いておられる方です。天から地上を見下ろし、地上の王たちが神様ご自身に戦いを挑もうとしている姿を見て、思わず笑って、馬鹿にするほどの余裕があると言うのです。天の

王座に着いておられる神様からすれば、地上の王たちの力など、取るに足りないものだからです。神様は、地上の王たちより遥かに力のある「王の王」である方なのです。

しかし神様は、取るに足りない地上の王たちを、笑い、嘲りますが、決して軽く扱ったり、相手にしないわけではありません。神様は、彼らの反乱に対して激しく怒られるのです。彼らは、神様ご自身に反乱を起こしているとは考えていなかかもしれません。あくまでも地上の王であるイスラエルの王に敵対しているだけだと思っているのでしょう。しかし6節で神様は、「わたしが、わたしの王を立てたのだ」と言われます。イスラエルの王は、神様ご自身が立てたのです。それゆえ、イスラエルの王に敵対し、戦いを挑むことは、同時に、神様ご自身に敵対し、戦いを挑むことであったのです。そのため神様は、激しく怒られるのです。

### 3. 「あなたはわたしの子、わたしが今日、あなたを生んだ」

7-9節には、神様ご自身がイスラエルの王に言われた言葉が書かれています。「**私は主の定めについて語ろう。主は私に言われた。『あなたはわたしの子。わたしが今日、あなたを生んだ。わたしに求めよ。わたしは国々をあなたへのゆずりとして与える。地の果ての果てまで、あなたの所有として。あなたは、鉄の杖で彼らを牧し、陶器師が器を砕くように粉々にする』**」。7節に「あなたはわたしの子。わたしが今日、あなたを生んだ」とあるように、イスラエルの王となることは、神様の子となることでした。イスラエルの王として油を注がれる時に、神様の子として新しく生まれるとされたのです。

では、神様の子とされたイスラエルの王は、父である神様から、何を譲り受けるのでしょうか。それは、地の果ての果てまでのあらゆる国々を、神様から譲り受けるのです。天の王座に着いておられる神様は、地上のすべてを治めておられるからです。イスラエルの王は、「羊飼い」のように鉄の杖によってあらゆる国々を治め、「陶器師」のようにあらゆる国々を粉々に打ち砕くようになるということです。

### 4. 恐れつつ、主に仕えよ。おののきつつ震え、子に口づけせよ

それゆえ、地上のあらゆる王たちは、神様に対して、またイスラエルの王に対して、どのような態度をとるべきでしょうか。10-12節を見てみましょう。「**それゆえ今、王たちよ、悟れ。地をさばく者たちよ、慎め。恐れつつ、主に仕えよ。おののきつつ震え、子に口づけせよ。主が怒り、おまえたちが道で滅びないために。御怒りが、すぐにも燃えようとしているからだ。幸いなことよ、すべて主に身を避ける人は**」。地上のあらゆる王たちは、神様を恐れ、神様に仕え、神様を礼拝しなければなりません。そして神様が立てた、神様の子であるイスラエルの王に口づけし、友好関係を築き、服従しなければなりません。そのようなことを悟り、身を慎むことが、地上のあらゆる王たちに求められることであったのです。

神様ご自身とイスラエルの王に敵対し、戦いを挑む者には、神様の怒りが燃え上がります。その神様の怒りを避けるためには、神様を恐れ、仕え、礼拝し、神様が立てた王に服従しなければなりません。つまり、神様に身を避けなければなりません。そして、そのように生き

ることが、幸いな生き方だと詩篇 2 篇は語っているのです。

## 5. 新約聖書と詩篇 2 篇

では新約聖書の時代のクリスチャンたちは、この詩篇 2 篇をどのように読んだのでしょうか。使徒 4：25-28 を見ると、このように書かれています。「あなたは聖霊によって、あなたのしもべであり私たちの父であるダビデの口を通して、こう言われました。『なぜ、異邦人たちは騒ぎ立ち、もろもろの国民はむなしいことを企むのか。地の王たちは立ち構え、君主たちは相ともに集まるのか、主と、主に油注がれた者に対して。』事実、ヘロデとポンティオ・ピラトは、異邦人たちやイスラエルの民とともに、あなたが油注がれた、あなたの聖なるしもべイエスに逆らってこの都に集まり、あなたの御手とご計画によって、起こるように前もって定められていたことすべてを行いました。」

新約聖書の時代のクリスチャンたちは、詩篇 2 篇に出てくる「主に油注がれた者」とは、イエス様のことだと理解するのです。そして、主に油注がれた者に敵対し、戦いを挑む王たちや国民は、ヘロデ王やポンティオ・ピラト、それにイエス様を十字架に付けた異邦人たちやイスラエルの民のことだと理解したのです。つまり新約聖書の時代のクリスチャンたちは、詩篇 2 篇をイエス様に対する預言の詩と理解したのです。イエス様がバプテスマのヨハネから洗礼を受けた時に、御霊が鳩のように降って、天から「これはわたしの愛する子。わたしはこれを喜ぶ」(マタイ 3:17) という声がしたあの言葉は、詩篇 2:7 の「あなたはわたしの子。わたしが今日、あなたを生んだ」という言葉の成就だと考えたのです。

「油注がれた者」という言葉は、ヘブル語で「メシア」、ギリシア語では「キリスト」という言葉です。その意味でも、詩篇 2 篇の「油注がれた者」とは、メシア（救い主）であり、キリストであるイエス様のことであると理解したのです。

新約聖書の時代のクリスチャンたちは、イエス様こそ、天の王座に着いておられる「主」なる神様の子どもであり、真の王である方だと理解し、そのイエス様を受け入れるかどうか、そのイエス様に従うかどうか、そのまま天の王座に着いておられる「主」なる神様を味方とするのか、それとも敵とするのかという問題になってくると理解したのです。

その意味で、詩篇 2:10-12 節は、私たちに語りかけられている言葉でもあります。「それゆえ今、王たちよ、悟れ。地をさばく者たちよ、慎め。恐れつつ、主に仕えよ。おののきつつ震え、子に口づけせよ。主が怒り、おまえたちが道で滅びないために。御怒りが、すぐにも燃えようとしているからだ。幸いなことよ、すべて主に身を避ける人は」。私たちは、神様の子どもであり、真の王であるイエス様に口づけすることが求められています。つまり、イエス様を受け入れることが求められています。天の王座に着いておられる神様は、イエス様に敵対し、イエス様を受け入れない者に対して、怒りを燃やし、滅ぼされるのです。その神様の御怒りから救われる道は、イエス様を受け入れる他ありません。「主の御名を呼び求める者はみな救われる」(ローマ 10:13) とあるように、イエス様に「身を避ける」他ありません。天の王座に着いておられる神様が立てた救い主、真の王であるイエス様を受け入れ、神様を恐れ、神様に仕え、神様を礼拝する生き方こそ、幸いな生き方だと詩篇 2 篇は、私たちに語りかけているのです。

## おわりに

詩篇 2 篇は、天の王座に着いておられる神様が立てた地上の権威を受け入れ、従うことを教えています。まず第一に、イスラエルの王を受け入れ従うことを、そして第二に、真の王であり、メシア(救い主)、キリストであるイエス様を受け入れ従うことを教えています。

しかし私たちは、天の王座に着いておられる神様が、イスラエルの王やイエス様以外にも、地上にあらゆる権威を立てて、全世界を治めておられることを知らなければなりません。ローマ 13：1-2 には、こういう言葉があります。「**人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられているからです。したがって、権威に反抗する者は、神の定めに従うのです。逆らう者は自分の身にさばきを招きます。**」

天の王座に着いておられる神様は、地上にあらゆる権威を立てて、今もなお私たちを治めておられます。私たちは、地上のあらゆる権威の下に生活しています。神様は、教会と国家を立て、教会には教会役員たちに権威を与え、国家には為政者たちに権威を与えられます。そのようにして私たちクリスチャンを治め、またあらゆる国民を治めておられます。また教育の場では、教師や先生に権威を与え、子どもたちや生徒たちを治めておられます。また商業の場には、社長や上司に権威を与え、従業員や部下たちを治めておられます。また家庭には、夫や親に権威を与え、子どもたちや家庭を治めておられます。地上のすべての権威の源は、結局、天の王座に着いておられる神様にあるのです。

ですから私たちは、神様が立てた地上のあらゆる権威に従わなくてはなりません。神様のゆえに、教会役員たちに、為政者たちに、教師や先生に、社長や上司に、夫や親に従わなければなりません。詩篇 2 篇から私たちが求められていることは、真の王であるイエス様を受け入れると同時に、神様が立てた地上の権威を受け入れ、従うことではないでしょうか。神様が立てた権威を受け入れることは、神様ご自身を受け入れることであり、神様が立てた権威に逆らうことは、神様の怒りを引き起こすことになるのです。

しかし地上のあらゆる権威は、残念ながら、しばしば道を誤ることがあります。自分が神であるかのように、私たちを支配し、神様に背かせようとすることさえあるのです。その時には私たちは、「**人に従うより、神に従うべきです**」(使徒 5:29)という御言葉を思い出し、勇気をもって抵抗しなければなりません。

また私たちは、自分自身が神様から権威を与えられることもあります。その時には、真の王であるイエス様の姿に倣い、皆のしもべとなり、皆に仕えることを通して、その権威を行使しなければなりません。私たちの権威は、支配するためではなく、仕えるためにこそ与えられているのです。

私たちを治めているのは、天の王座に着いておられる主なる神様であり、真の王であるイエス様です。私たちは、イエス様を受け入れ従うと同時に、神様が立てた地上のあらゆる権威を受け入れ従い、そのことを通して、神様を恐れ、仕え、礼拝して、平安で落ち着いた、幸いな生き方をしていきたいと願います。

天におられる私たちの父なる神様。

あなたは、真の王であり、メシア（救い主）、キリストであるイエス様を立てて、全世界を治めようとされました。しかし多くの人々が今も、あなたが立てた真の王であるイエス様を受け入れず、従おうとしません。どうか人々があなたの御怒りから救われるために、イエス様を受け入れ、従うことができますように。

またあなたは今もなお、地上にあらゆる権威を立てて、全世界を治めておられます。どうか私たちが、あなたのゆえに地上のあらゆる権威に、喜びをもって従うことができますように。また立てられている権威者たちのために、祈ることができますように。

また私たちがあなたから権威を与えられた時には、真の王であるイエス様の姿に倣い、人を支配するのではなく、皆のしもべとなり、皆に仕えることができますように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。